



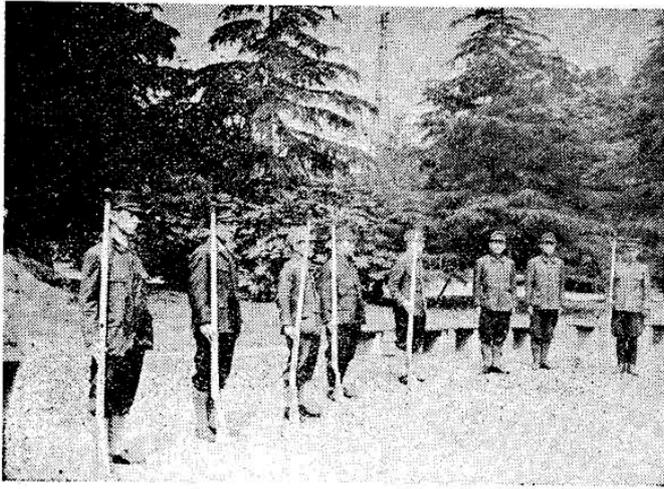
決戦下國民の責任

同盟郷軍分會、社員訓練を開始

社長 古野伊之助

決戦の年既に半ば経過

昭和十八年こそは決戦の年であるとかねて頻りにいはれてきたが、その決戦の年もほぼ半ばになり、いよいよ身近に熾烈なる戦火を感じ



(本社員本銃訓練、右より白仁秘書、鷹嘴常務、古野社長、塚本、大平、石部各局長、川島、西村各部長)

號 十 七 第
月 七 年 八 十 和 昭
行 發 日 十 一 月 每
行 發 日 十 一 回 一 月 每
錢 五 部 一 價 定
錢 十 六 (共 稅) 分 年 一
一 才 田 杉 總 發 行 發 登
人 刷 印 刷
國 公 谷 比 日 區 町 趙 市 京 東
社 信 通 盟 同 所 行 發

この時、天は日本國民一億の決意を、いやが上にも固めさせようとしたものであらうか、相踵いで發表された山本元帥の戦死、山崎部隊の最期、この二つの事實は今も大東亞戰爭勃發以來、もつとも深刻な感動を一億國民の胸に刻みつけたことと思ふ。

山本元帥が自ら陣頭に立ち、飛行機上に壯烈な戦死を遂げられたことを想ひ起す度に、一億國民はひとしく自らのなすべきことを自ら考へざるを得ないと思ふ。

また山崎部隊の二千数百名は一人残らず壯烈無比な最期を遂げたが、この事實は、いふまでもなく世界の戦史に類例をみざるものである。眞に萬邦無比の日本魂が、その事實の間に躍動してゐるとみられる。

この二つの大きな事件、これをきっかけに一億國民は、この戦争を徹底的に戦ひ抜かなければならぬ。勝抜かねばならぬと決意を新にしたのである。澎湃として全國津々浦々に漲る國民の決意は、或は町に、或は村に、いたるところに燃上つてゐることを諸君は毎日目撃してゐることと思ふ。

一 德國の決意
ヨーロッパの情勢は一體如何なる變化をみせることであらう。兎に角このヨーロッパ戦争は勃發以來足掛け五年を経過してゐるので敵の打撃疲弊は甚しいものがあること自明の理である。但し盟邦にして決して樂な戦を闘つてゐるわけでない。ヨーロッパはどんな

變化を來すであらうか。もちろんヨーロッパの戦局は太平洋の戦局に影響なしとは斷言出來ない。しかし如何なる事態が発生しても、われわれ一億國民が決意を固めて、われわれの部署における戦を戦ひ抜く覚悟をきめてゆくことが山本元帥、山崎部隊の壯烈な戦死によつて示された天意に副ふものであると考へるのである。

徹底的に勝ち抜くか、一億全部がこの嶋の上で討死するか、その二途のほかに國民の進むべき途はないのである。この決意をもつて臨めば米英撃滅のごときは何でもないことだ。われわれは英米が屈服するまで持久戦をやり抜く覚悟を決めてゆくべきだと思ふ。

兵員・兵器・食糧
しかしこれを具體的に考へれば三つの分野に分れる。その一つは兵員の充實である。あり餘る皇國日本の人的資源を動員して、いくらでも續々と、山本魂、山崎魂を繼いで現れる兵員を無限に前線へ送ることが出来る。

第二は兵器の充足である。飛行機、船舶等の徹底的増産によつてまた科學の飛躍的研究發達によつて、米英の科學の水準を突破し、無限の寶庫南洋の資源と、帝國の生産設備とを一體として、いやが上にも兵器の充實確保を期する。そして何時までも戦ひ抜く生産増強へと力を注がねばならぬ。

第三はいふまでもなく食糧の確保である。國民生活が食糧問題から崩壊した國が戦争に敗ける。國民はこの點をしつかり認識すべきである。

思想戦の勝利
國の對内對外思想戦の要衝に職を奉ずる同盟の同志は、それぞれ部署において、その方向をしつ

かり把握して、しかして内においては國民の決意を固め、外に對しては敵國の戦意を撃退すべく死物狂ひの努力をしなければならぬ。考へれば考へる程事態は重大である。われわれの擔當する任務はいよいよ重きを加へてゐる。何時如何なる障礙が起らうとも、一つ粉砕して必ず最後の勝利を獲得しなければならぬ。持久戦は米英の策略にあらずして、日本こそ徹底的に勝ち抜くまで持久戦を戦つて行く計畫なのである。

どうかその心積りで、これから直向する兵員の充實と、兵器の充足、それから食糧の確保、煎じつめれば戦争の最後の努力はこの三つの問題に歸着すると思ふのである。諸君もそれぞれの部署において、この問題をよく活かし、十分よく検討して、さうしてこの重大な局面に際して、われわれが負荷する任務を遂行されたい。

わが國の當面する問題に對して徹底的な理解をもつて、これを一億國民によく認識させ、よく理解させ、その上に眞剣な熱意を燃え上らせて、この戦争完遂へと鐵石の決意をもつて一路邁進するやう思想戦の戦士たる任務を果すことに努力して頂きたい。

社員の軍事訓練
序にこの時局の重大を加へるにつれて、われわれの體制も眞剣なる決戦體制に移さなくてはならぬといふ考へから同盟郷軍分會を中心とした社員訓練をはじめたところ、諸君は皆よく意のあるところを理解して、朝早くから眞剣に協力してくれた。

戦争は如何なる場所、如何なるところにも存在し國民は一人残らず戦士である。諸君はそれぞれの部署において、この大戦を戦つてゐるのだといふ心積りで、間斷な

く心身の錬磨を積んで貰ひたい。いつ何時、諸君の大半が前線に乘出さなければならぬかも知れない。現に度々いつてゐる話であるが、ドイツ、イギリスなどの實例によると、國家代表通信社員の半数は既に國家のために應召の役目を背負つて或は前線に、或は軍事工場の勞務などに服してゐる。さうした立場からみると、われわれ同盟はまだ本當の戦争段階に入つてゐないといつても差支へないからその状態だと思ふ。或はこの半数、若くは三分の一の人数をもつて、これだけの同盟の使命を果して行かなければならぬ事態に遭遇することも十分覺悟してかからなければならぬ。

心身兩面の鍛錬
同時にまた思想戦の戦士として國民全體に積極果敢な思想戦を展開する上に、間斷なく世界の情勢國內の事情などに正しい理解をもつて、その職責を果さなければならぬことはいふまでもない。幸に別館の新築も完成したので、永らく場所の關係から休止してゐた時局諸問題に關する研究會も再開したいと思ふ。さうして、みんなが眞剣な工夫と努力によつて世界の情勢、國內の實情を正しく日本國民に理解させて、この戦争を徹底的に戦ひ抜かなければならぬ。

この意味でわれわれ自體の研究檢討を進めて行く各種の研究會も再開したいと思ふ。だが今われわれの直向する時局と、これに伴つて擔當する使命の重大さを考へ、飽くまでも同盟同志眞剣な心身兩面の鍛錬をなしつつ、如何なる變局にも必ず即應するの決意と準備を整へて行きたいと思ふ。どうぞその心積りで御協力願ひたい。

(昭和十八年六月八日日本社大詔奉戴式訓示)

天意の啓示

天意の啓示

天意の啓示

同盟産報本隊

昭和十八年七月一日現在 (中隊及び小隊の括弧内) 数字は隊員数を示す

第一大隊 (一〇三名)

大隊長 塚本義隆

隊附 川島信太郎

第一中隊長 川島信太郎

一小隊長(16) 相澤 豐藏

二小隊長(13) 海藤 紋藏

第二中隊長(3) 伊藤 勝司

第三中隊長(5) 船木 重光

第四中隊長(8) 麻生 林策

第五中隊長 上村 藤吉

隊附 高 岩吉

一小隊長(6) 伊藤 大二

二小隊長(5) 木口 次郎

第六中隊長(6) 春日 昇

第七中隊長 藤川 覺

一小隊長(11) 伊藤 愛二

二小隊長(10) 高宮 利彌

大隊長 大平安孝

隊附 萩野 伊八

同 長谷川才次

同 秋山 慶幸

同 内海朝次郎

同 小林猪四郎

同 入江啓四郎

同 豐島 清光

第二大隊 (二六四名)

第一中隊長 田中正太郎

隊附 後藤 丙午

一小隊長(8) 藤川 佐吉

二小隊長(10) 高橋 榮一

三小隊長(13) 玉井平太郎

四小隊長(9) 尾林 福松

第二中隊長 大森吉五郎

隊附 沼佐 隆次

一小隊長(8) 石井 文治

二小隊長(9) 木村 進

三小隊長(9) 宮本 基

四小隊長(9) 横井 雄一

五小隊長(8) 深澤 幹藏

第六中隊長 新井 正義

隊附 小山 武夫

一小隊長(19) 大鋸 時生

二小隊長(10) 田中 德

三小隊長(9) 永山 公明

第四中隊長(14) 淺野 豐

第五中隊長(12) 菅田 英祥

隊附 樋口 憲吉

同 長谷川才次

同 木下 秀夫

同 三輪 武久

同 藤井信次郎

同 鈴木 茂

同 大場 健次

同 中村 實

同 三小隊長(12)

同 下條 雄三

第三大隊 (二〇八名)

大隊長 松本重治

隊附 加藤萬壽男

第一中隊長(5) 牧内 正男

第二中隊長 安達鶴太郎

隊附 石田 貞一

一小隊長(5) 高須 忠彦

二小隊長(5) 濱田久米夫

第三中隊長(10) 松田 常雄

隊附 銅手 譽四

第四中隊長 大星 石松

一小隊長(4) 平田 泰吉

二小隊長(8) 今村 俊行

三小隊長(7) 上出 正七

第五中隊長 井上 勇

隊附 安保 長春

一小隊長(9) 黒澤 英二

二小隊長(9) 田崎 花馬

三小隊長(8) 石井 卓朗

四小隊長(9) 村山 謙

五小隊長(7) 林 祐次

第四大隊 (二〇五名)

大隊長 石部幸次

隊附 稻本 國雄

第一中隊長(6) 青木榮次郎

隊附 植松 尙男

第二中隊長 板垣 武男

隊附 三浦 良知

第五大隊 (二二三名)

大隊長 鷹嘴 壽

隊附 升井 芳平

第一中隊長(7) 升井 芳平

隊附 竹市 信康

第二中隊長 福井 輝三

隊附 周藤 清

一小隊長(10) 安達 三郎

二小隊長(9) 岩崎 嚴

三小隊長(5) 杉 勝

第三中隊長 竹中 三郎

隊附 松尾 信

一小隊長(10) 菊池久太郎

二小隊長(10) 芳賀 勇

三小隊長(11) 國頭 喜治

四小隊長(8) 松岡伊一郎

五小隊長(5) 大島 惣平

第四中隊長(15) 山本 政常

第五中隊長(12) 住谷 金吉

隊附 山内 保三

同 森 元治郎

同 同盟産報本隊總員七〇三名

同盟産報青年隊

總隊長 山本政常

第一青年隊 (四一名)

【本隊第一大隊所屬】

隊長 和田 淳一

第一班長(6) 齋藤 直照

第二班長(9) 武田 弘

第三班長(13) 丸山 博

第四班長(8) 松川 哲

第五青年隊 (一四七名)

【本隊第五大隊所屬】

隊長 久保田久男

第一班長(10) 清田 英美

第二班長(9) 金光 一

第三班長(9) 藤岡 廣士

第四班長(9) 町田 正三

第五班長(10) 駒谷 朝則

第六班長(9) 中村文二郎

第七班長(9) 米山 爲一

第八班長(8) 森原 健一

第九班長(8) 丹治 喜一

第十班長(6) 佐々木 實

第十一班長(8) 森田 和幸

第十二班長(10) 岡村 健一

第十三班長(8) 中村 弘

第十四班長(5) 品治 一男

同盟産報女子隊

總隊長 高橋與三治

第一女子隊 (五七名)

【本隊第一大隊所屬】

隊長 布清富美子

第一班長(10) 奥住日沙子

第二班長(10) 結城 時子

第三班長(11) 橋本 愛子

第四班長(9) 市川 久子

第五班長(11) 木村 シゲ

第四女子隊 (六二名)

【本隊第四大隊所屬】

隊長 今井 てい

第一班長(15) 市川 うた

第二班長(6) 鈴木 鈴子

第三班長(7) 水谷千代子

第四班長(16) 前島 まき

第五班長(12) 大栗 スミ

同盟産報本隊總員七〇三名

.....
(切
取
線)
.....

汪主席、同盟との提携強調

中央電訊社三周年記念式訓示

國府主席汪精衛氏は去る五月一日中央電訊社南京本社における同社創立三周年記念式に臨み同社社員に對し要旨左のごとき訓示をなし、時局認識を深くして一層の奮起努力を要望するとともに、同盟通信社との提携緊密化の必要を強調した。

本日こゝに中央電訊社三周年記念日を迎へ、予はこの三年來社員各位が擧げられた努力に對し至極満足に思ふものである。元來予は中央社に對し三つの期

待をかけてゐたのである。すなはち該社は政府の眼となり耳となる國家的通信社であり、そのためには全國通信事業の統一を要したのである。蓋し正確迅速なるニュースの供給は全國通信事業を統一して始めてなし得ることなのであるこの點、中央社はほほ、その目的を達したといつても過言ではない次に、友邦日本の報道機關との提携であるが、同盟通信社との關係は頗る緊密にして、東亞輻軸通信事業の合作成るといへるのである。これらのことはすべて諸君の

努力の結果齎されたものであり、同時に同盟通信社の協力により今日の驚異的躍進を得られたものである。中央社に對する最後の希望は、いまや着々行はれつつある世界輻軸報道機關との提携であるが、これまた必ずや大なる成功を収むべきことを疑はない。凡そ事業を創むるに當つては誠意と忍耐をもつて、いかなる逆境にも屈せざることが肝要である。諸君は今後ますます倍舊の努力を傾注せねばならぬ。還都以來吾人は「罪己的精神」を唱導して同志を鼓舞激勵し諸君に反省を求めた。惟ふに同志の多くは和平運動を樂觀するの餘り一度難境に達するや悲觀的、絶望的となり勝ちである。吾人は過去三年の経験によ

り、誠意、忍耐なくして今日の結果なく、絶えざる努力が不斷の進歩を生じ、友邦日本との提携も可能となつたのである。日本は曩に宣傳各機關を返還し經濟上にはまた中央儲備銀行の設立と相俟つて誠意ある提携の實を示した。われわれとしては一朝一夕の功を思はず、徒に懷疑せず、たゞ歩一歩前進すれば自づと着實なる成功は得られるのである。中央社同人が多少なりとも成功を得たりとすれば、それは誠意と忍耐に基くとつても過言ではない。予はここに諸君に對し、一層の努力を要望するものである。最後に友邦日本報道機關の協力に對し感謝の意を表し、併せて社員各位にお會ひ出來たことを嬉しく思ふ。



互助會報告

【五月分】

△結婚

- 陸奥陽之助 (海外局)
富田 清萬 (同)
澤入 猛次 (中支總局)
要 保太郎 (聯絡局)
國頭 喜治 (同)
足立 彰 (編輯局)
吉川 喜德 (關門支社)
上田 博 (下關支局)
竹林 重一 (同)
堀江 倉一 (臺北支社)
佐藤 敏 (旭川支局)
村上 輝雄 (甲府支局)
兩角 泰助 (同)
丸山 三郎 (札幌支社)
住谷 新市 (大阪支社)
鶴見 安 (保定支局)
松本 重夫 (中支總局)
橋本 國春 (同)

△出産

- 梅原 醇一 (總務局) 三女
村上 定一 (支社) 長女
豐島 清光 (編輯局) 長男
村川 武躬 (盤谷支局) 二男
花岡 二三 (長野支局) 四男
吉崎 肇 (臺北支社) 長男
小栗周三郎 (甲府支局) 五男
井上 次雄 (新潟支局) 長女
横岡 卓爾 (函館支局) 三女
島田 忠雄 (大阪支社) 二男
友田 壯一 (同) 長男
木津 睦夫 (岡山支局) 長女
木村 四郎 (中支總局) 長男
藏原 秋利 (漢口支局) 次男
福成 秋雄 (北支總局) 三女
安本 宣雄 (同) 長女
瀨田石富彌 (同) 長男
上野 茂 (静岡支局) 二男

△應召、入營

- 松本 兼吉 (經濟局)
田中 庸夫 (編輯局)
植 瀨 敬 (同)
中島 義治 (同)
高瀬 太郎 (經濟局)
小林 重次郎 (廣島支局)
天野 敬四郎 (聯絡局)
福田 武雄 (關門支社)
相野 實 (横濱支局)
深川 藤喜 (福岡支社)
小川 稔 (名古屋支)
平野 隆 (同)
小澤 俊則 (仙臺支局)
菊島 武 (京城支社)
杉野 伊知郎 (同)

△見舞

- 松浦 富士雄 (名古屋支)
千鳥 弘 (同)
河西 文子 (總務局) 病氣
田中 末吉 (同) 同
武者幸四郎 (編輯局) 同
古館藤十郎 (經濟局) 同
小川 彰 (編輯局) 同
長尾 廣四郎 (同) 夫人病氣
石川 道別 (經濟局) 子供病氣
兒島 又喜 (編輯局) 病氣
今井 政吉 (川崎支局) 子供病氣
鹽野 三郎 (總務局) 病氣
力石 百彌 (海外局) 同
川村 アツ (編輯局) 同
新井 正義 (同) 同
小林 重次郎 (廣島支局) 同
吉田 辰雄 (經濟局) 夫人病氣
山本 滋雄 (同) 病氣
辻 正二 (總務局) 同
渡邊 秀雄 (海外局) 長男病氣
杉山善之助 (總務局) 病氣
松尾登美子 (同) 同
穗谷 四郎 (廣島支局) 同
倉澤 徳治 (長野支局) 同

△弔慰

- 田崎 喜衛 (編輯局) 祖母死亡
田崎 花馬 (海外局) 夫人死亡
古館 藤十郎 (經濟局) 死亡
松本 兼吉 (同) 實父死亡
宮川 卓二 (編輯局) 産兒死亡
不動 健二 (總務局) 次男死亡
三仙 交二 (經濟局) 二女死亡
高橋 耕司 (聯絡局) 夫人死亡
小林 徳實 (廣島支局) 六男死亡
倉澤 徳治 (長野支局) 實父死亡
山田 正次 (秋田支局) 同

△退社

- 山田 正次 (同) 實妹死亡
沖 篤 (福井支局) 死亡
藤井 實男 (大阪支社) 同
渡邊 清次郎 (函館支局) 實父死亡
鈴木 藤夫 (北支總局) 死亡
池上 幹徳 (伯林支局) 實父死亡
崎田 延幸 (佐賀支局) 祖母死亡
伊藤 喜義 (名古屋支) 母死亡
京谷 定茂 (マカツ) 次男死亡
高橋 建次 (京都支局) 父死亡
山本 定司 (名古屋支) 養父死亡
林 東作 (同) 妹死亡
越知 利惠 (神戸支局) 死亡
德永 廉 (同) 産兒死亡
村瀬 太一 (仙臺支局) 母死亡
加藤 三四治 (同) 夫人死亡
廣田 應球 (京城支社) 實父死亡
田中 彰 (福岡支社) 實母死亡

合計件数 一七五件
金額 一、四八〇圓

マカツサル

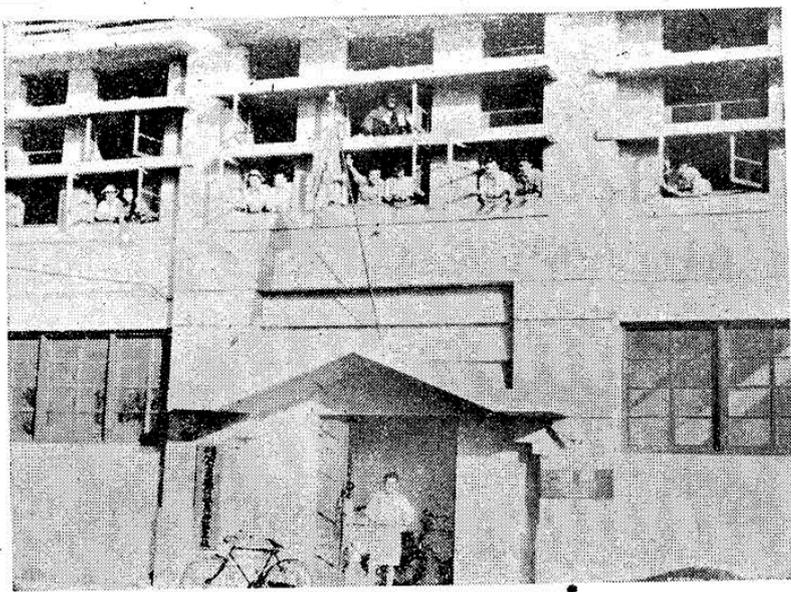
マカツサルよとい

本社航空 森 元治郎 部次長

マカツサル——こんなところもあるのかと私等がこの地名を知つたのは昨年春アメリカのデマ放送で、マカツサル大海戦……日本艦隊を撃破すの夢物語以来であらう私はここに踏止つて支社の新設に當つたが、滞在六月、その間もマカツサルといふと嘘と同意語のやうに思はれてならなかつた。これも先入感といふ人間の避け難い愚さがなせる業で、現實はやつぱり人の住む南國情緒に富んだところだ。

人口は元來八萬ばかり、町は海に沿つて南北に別れ、北は華僑の商店街、南はオランダ人の閑雅な住宅地になつてゐた。淡い潮香を含んだ海からの微風は南國の灼熱をいよいよ加減に緩和してくれ、快い午睡をもたすけてくれる。

南方のどこへ行つても比肩するものを發見できない美しい並樹、また住宅地一帯の静かなこと、何一つ神経をいらだたせる機械音は



マカツサル支社各々屋正面

聞えない。インドネシアは何處も同じく跣足であるから下駄や靴のやうな音も街には聞えない。時々シューシューと風をきつて行くのは自轉車ぐらゐのものだ。

耳にするのは聲高に談笑する同胞の語聲やテニスのボールのはづむ音くらゐだ。満天それこそ降るやうな星の輝く夜は内地の支那その呼ばを想はせるサテ賣(燒鳥)の呼聲のみが故國を偲ばせてくれる。ツルゲネブの小説「音」の描寫をつくりだ。

南八景の一?

海も穏かだ。血のしたたるやうな落日に向つて信仰心の深いネシアが両手をあげては船上にひれ伏し、お祈りする姿はなんともいへぬ平和なものを感じさせる。私も南方を巡歴したが「マカツサルの夕照」は南八景の一に數へらるべきものだと思ふ。社長もこの海邊が餘程気に入つたと見え「海岸ぶち社員に休憩所のでつかいのを建てろ」といはれてゐるたぐらゐだ。

ここには日本人の好きな時計、寫眞機、靴などの所謂「物」はないが、食物は實に豊富だ、果實はそのうまみに「舌まで一緒に呑み込み」兼ねまじいほどだ。米も少し米あり、殊に魚は鮭を除いてはなんでもある。私も暇のあるときにはパツサル・イカン(魚市場)に自轉車で乗込んで魚等を買つて来て、鳥賊刺身を料理したこともある。

一方官能を刺戟する享樂機關はない。酒もない、つまり、またもない健康地なのだ。社員がやることは歌辯か、運動か、晝寝だ。出社には自轉車か徒歩の外はない。好むと好まざるにかかはらず身體は丈夫になる一方、金は溜るばかりといふ樂天地だ。それが證據

慰問演藝會

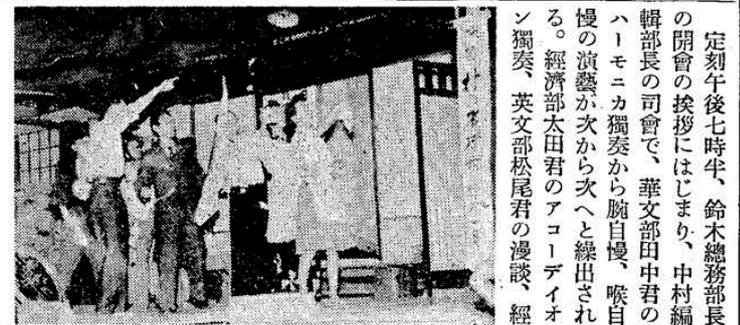
北支總局の 慰問演藝會

四月二十日から約一ヶ間にわたつて河南、山西、河北の省境に展開された拾八春大行作戦に、ペンを執り、無電機を擔つて烈々たる「同盟魂」を發揮、みごと報道戦の勝利を博して無事歸還したわれらの同志を慰めやうと、わが北支總局では酒井華文部次長の率ゐる同盟一座をもつて五月二十九日夜總局内の假設舞臺で盛大な「慰問演藝大會」を催した。舞臺裝置から舞臺照明まで熱心な演藝研究員の手によつてなされた假設舞臺に緞帳がはりの防空幕が垂れさがつてゐるのも時局色を反映して微笑ましく感じられる。

支社設營の苦心

マカツサルが案外いい所だと気が付くまでにはそれでも二ヶ月ばかりかかつた。といふのは支社設營に四苦八苦して美を見出す餘裕がなかつたからである。社長から中村伸康(政経 報道班員と協力して支社をつくれといはれたのが昨年十一月二十日のことだつた。十二月一日までに通信發行をやれといふことである。設營などといふことをやつたことがない私は内心ギクツとした。それに〇〇問題といふ重大案件の處理も委ねられてゐた。

社長は當時病氣して居られたがそれでも愈々歸途につかれる朝、機上から私を呼んで「獨斷專行に



定刻午後七時半、鈴木總務部長の閉會の挨拶にはじまり、中村編輯部長の司會で、華文部田中君のハローモニカ獨奏から胸自慢、喉自慢の演藝が次から次へと繰出される。經濟部田田君のアコーディオン獨奏、英文部松尾君の漫談、經濟部東野嬢の日本舞踊、社員家族の鈴木、山本さんの御嬢さん三人の童謡舞踊、總務部菅生嬢の獨唱これもが支人はだしの素晴らしいものである。この間編輯部の石崎君から從軍部隊を代表しての前線報告が行はれ、佐々木總局長令嬢知子さんの日本舞踊「柳の雨」の特別公演が満場の拍手を呼んで第一部を終つた。

少憩後第二部に入つた。ここでは當夜の呼物である演劇「村の飛行兵」と「息子」、寸劇「人生劇場」と「斥候兵」が製版部佐々木君の「娘義太夫」とともに參會者に深い感動とほのぼのとした明るさを與へるのであつた。かくて家庭的團圓のうちにも語りともて歌ひ、明日の戦ひへの英氣を養つて同十一時過ぎ目度くはねて散會した。

(寫眞は劇「村の飛行兵」の舞臺)

ラジオの前で萬歳

なんでもやれ」と叱咤された。成功の成算たぬ自分は「よしさういはれたからには」と力んでみたが「どうしたらいいか」考へるだけで憂うつになつた。中村君も小さい聲で「森君やうよ」と袖を引つぱられるのであつた。註文つけられたら一寸困るが何んでもやれといふなら出来るだらう、肚は決つた。

設營隊員は中村、脇本(無電)兩君との三名だ。社屋は、紙は、鉛筆は、印刷機械、受信機は、金は何一つも手もとにない。十日間の餘裕で無から有を出すのだホテルの一室を參謀本部にして頑張つたが一日までには間に合はなかつた。

そのうちスラバヤ秋葉支局長の好意で必要資材は送られるし、社屋も入手した。脇本君はラジオで放送をキヤッチするまでに溜ぎ付けたので大詔奉戴日を期してマ支

この日は優秀な受信機を飛行機で持ち歸つてきた。脇本君の手で直ちに雑音居士ラジオと置換へられた。澄んだ、しかも高いツーツーの音をきいた時には如何にも忙しさに仕事が始つたといふ興奮に身内がしびれた。三人は萬歳を唱へた。

兎角疲れ勝ちの気分もこの電波の齋す快音に尻を叩かれて三人は魅つたやうに各自の任務に突入した。脇本君は無線を、中村君は設營一般、編輯を、私は對外交渉と分野はきまつた。晝食は殆んど攝る暇はなかつた。睡眠も短い。晝寝とマンデー(水浴)もしなかつたが、誰一人病氣にもならなかつた南方生活常識を根本的に覆した勝利感に酔つた。(次頁へ續く)

原人オへの能力

同盟通信は文字に飢えたマ市の同胞に歓迎された。いくらでも刷りたいが紙がない。廣告用紙や裏の白い帳簿の紙を漁つてはこれに充てた。

物の不足のほかに苦心を要したのは人であつた。インドネシアを如何に働かせるかに骨身、否神經を消耗させた。

オランダ統治時代とことなつて今やこちらが相手の人格を認めて協力させやうといふ理念は、せつちかちにも私等の頭から彼等を日本人並みに考へ待遇し勝ちとなつた

これがために種々の行違ひを生じた。彼等は可哀相にオランダ人から何も教へられなかつた。こちらは立派な通信を早く澤山出さ

ら、社屋も整理させようと焦る。悪いことには脇本君を除いては人後に落ちないせつちかち者二人だ

馬來語といへば二人とも十か十五語くらいしかわからぬ。せきたてられる彼等こそ氣の毒だつた。ただ恐い目、恰好、意氣込みに押されてカンを働かしては動いてゐたやうだ。

カンが習熟によつて養はれ、よくなつて行くものだ。彼等にはこれまでチャンスが與へられてゐなかつた。

ネシヤのオベにこれは〇〇ポルトだから注意のことといへば、そつとソケットのところを手を伸ばして危険な否かを確かめやうとしてゐるのを發見してアワス(危い)馬鹿野郎と怒鳴り付けたこともある

受信はなかなか上手にやるが、機械知識はまづ零だ、一寸でも聴えなくなると忽ち狼狽、私等との

ころに飛んで来て機械が壊れたと告げる。何處か? と問へばティダ・タウ(知らん)と答へる。これちやなんともならぬ。盛んに頭を振つてゐるから何してゐるのかと見れば、受信器が裂けるやうな音響を發してゐる。調整を知らな

いから蠅を追ふやうに頭をふつてゐるらしい。電波はふり落される程弱氣なものぢやない。

これが一級のおべである。その度毎に脇本君が世話をやく。こちらが使はれてゐるやうであつた。

狡猾な蘭人
かかる原因はどこにあるかといふに、オランダ人は決してネシアに深い原理、技術を教へず、ただ機械の操作のみを要求した。彼等の向上を恐れたのである。若し故障が起ればよし俺が直してやる

あるのが馬鹿らしくなつて止めて仕舞つた。そしてこんどは先進國である米國に留學を企てたわけです。留學といつて貧乏書生のことですから、親から學費を買つて何がしの大學へ通ふといふことは出来ないもので二年後に開かれる桑港萬國博覽會日本館事務員をねらつて先づ大正博覽會外國館事務員を拜命したといふ次第です。

呑氣園後日譚

第二回

時 第一幕のち約一時間
場所 帝國ホテル
人物 第一幕の主客の外同じやうなイガ栗頭の中年者三四加つてゐる

客「これは大變御馳走様になりました。突然伺つたのに、のんき園の友情そのまゝで迎へて戴いて私もあの頃に歸つたやうな氣がします。ところでのんき園を解散された理由は伺ひました。

博覽會から通信社へと歩かれた道はまだお預けになつてゐますが、あれを話して戴けないでせうか。實は以前から鶏屋の青年が如何にして今日世界的の人物になられたか。私が依然たる身分であるに顧みて、一度伺つて

主「これはとんでもない。私なんか世界的の人物でも何でもありませんよ。それより林さん、貴方は日本一の養鶏王となられた立派な業界の成功者です。出世なら貴方の方で、私は依然たる貧乏青年です。もつとも金のないのは何等苦痛にはなりません

客「冗談はぬきにして、是非出世の種を明して……」
主「イヤ、私はあの頃、書間働いて夜間國民英學會を卒業、同じく早稲田の夜學に二月ばかり通つたが、金持ちの坊ちゃん達と一緒にになつて悠長な本を讀んで

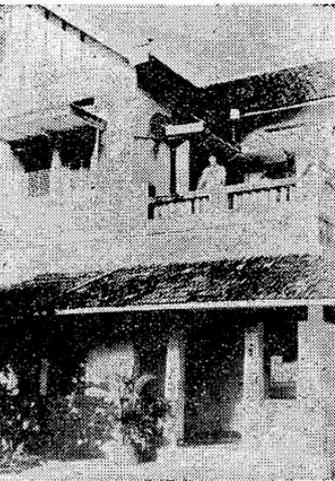
とブランド(彼等の發音に従ふ)技師共はネシアをつきのけて修理してやる奸悪な政策をとつてゐたとオベの一人が私に訴へてゐた。いまは田中盛文主任について懸命の勉強、腕はメキメキ上り、よき同盟人になつてゐる。

設置だから金にいとめはつけぬ(それ程ぢやないが)札ビラを切る私等を眺め、また色んな偉い人

が參觀にやつて来るのをみた使用人等は同盟は大したものだと悟つたのであらう。白ズボン、ネクタイ姿に威儀を正して出社するやうになつた。

太郎・次郎物語
ネシアにも色々な種族があり、各々特徴を持つてゐる。使用人に算盤高く、權利義務を眞先に主張する手合もあつた。

社宅に太郎と次郎と名付けるボーイがある。次郎の利發なことは凄いくらゐる。日本語も獨學でドンドン覚え、私等の氣



持ちもよく理解する。太郎は愚直で大菩薩峠にて来る與一兵衛に似てゐる人物。「何時か」と聞いても時計の前でおじぎをするだけで、ついぞ返事をしたことがない。彼は時計は音できくものときめてゐるらしい。この二人はネシアの二つのタイプの代表である。これらのネシアを鞭撻し、彼等がまづ一通りのことを指圖なしに實行しだし、お蔭で私等も神經を擗り減らした頃やうやく支社は形を整へて来た。

ところだなあといふ感じを持つた。」
客「なるほど」
主「丁度そのころ米國の排日問題のやかましかつた頃で、日本の朝野は米國から野蠻扱ひをされぬやう、何でも日本の文明國であることを米國に知らせなければならぬといふ騒ぎである。それには通信社を先づ作らうといふことになり、當時米國通信社の東京支局長であつた英國人ジョン・ラッセル・ケネディといふ男に支配人を頼んだ。當時日本には通信社のマネージャーをすなはて人物がなかつた。情けない話だがほんとのことです。その以前私はAP通信社のボーイをしてゐたことがあるので、このときケネディから切に招かれて博覽會志願を止め、米人社員の助手といふくらゐの格で新しく出來た國際通信社に入つたのです。」

客「日本通信社の創造史ですね。」
主「さうです。それから段々米人といふ奴は下らぬ奴だといふことを發見し、次第に仕事の上で彼等を追拂ふ話になるんですが實は今日一時半から翼餐會の總務會があるんで、甚だ失禮ですが、これで失禮させて下さい。」
客「イヤ御多忙なところほんとに有難ふございました。」
主「一同退席」

汗を流すまでの運動をし、睡眠を充分とれば南洋ボケはしない。朝夕はなかり冷えるから腹巻を持參すること。私も南で腹巻が要るとは夢にも思はなかつた。汗に汚れた肌着類はすぐ着かへること。以上を實行すればデング、マラリアに悩むことはない筈。但しそれに罹つたとて私は責任を持ちません。(寫眞(本頁)はマカツサル支社宅)

南洋ボケ豫防法
南に行かれる人のため無病息災法をつけ加へておく。まづ齒の悪い人は必ずこちらで治療して行くこと、不養生をするときつと肝臓を悪くし内地まで持ち越し一生苦勞するから御注意のこと。あれほど果實、野菜がありながら脚氣になる人が多い。草木の成長が早過ぎてビタミンが莖葉にのり切らな

〔附記〕 以前社報編輯者から社報に「社長室の一日」といふ題で書けといはれ断つたら翌月の社報に「陸軍中尉が峻拒した」と書かれてしまつた。そこで先月一寸書いたら、こんどは下らぬものを書くなと叱られてしまつた。しかし筆者は敢て續篇を書いた。今どき俺は學歴がないからと下らぬ卑下をする若い社員を叱咤せんためである。(筆者)

